OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ファシズムへの偏流 : ジャック・ドリオとフランス人民党 (3)
Author(s)	竹岡, 敬温
Citation	大阪大学経済学. 2013, 62(4), p. 18-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57014
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ファシズムへの偏流

―ジャック・ドリオとフランス人民党―（3）

竹　岡　敬　温†

10. 反逆と除名

ドリオと共産党指導部との対立にとって決定的な影響をあたえたのは，1934年2月に起こった諸事件である。しかし，これらの事件の重要性を理解するためには，すこし時間をさかのぼって，あらためて1933年11－12月の第13回コミンテルン中央委員会総会と1934年1月23－25日のフランス共産党中央委員会から話を始めなければならない。

既述のように，ドリオは第13回コミンテルン中央委員会総会には招かれなかった。しかし，ドリオは総会に出席するフランス共産党代表に，社会党（SFIO）にたいして，たんに「下部での統一戦線」だけではなく，「トップでの統一戦線」を提案するよう勧めた文書を託した。

これにたいして，コミンテルン執行委員会では，トレーズが「このような提案をいまするのは，自称左翼急進主義のデマゴーグの立場に奉仕し，下部での統一戦線を確実に実現するためのわれわれの努力を妨害するとおもわれるのに，いまなおブルム＝フォール一派のリーダーたちに個人的に訴えかけることが可能だ」と信じている「同志たち」がいることを激しく非難した。社会党では，マルセル・デア，アドリアン・マルケ，ピエール・ルノーデル，バルテレミー・モンタニョンにつづいてネオ・ソシアリストたち，すなわち改良主義の最右翼少数派が離党したばかりであるが，今後，たとえ同党がさらに頑強な反共産主義分子を厄介払いできたとしても，1933年1月に，フランス共産党が社会党（SFIO）指導部と労働運動の統一について話し合いをしたとき，同党指導部はこの協力関係にほとんど熱意を示さなかったのであり，このような誤りが2度と繰りかえされないことが必要である，とトレーズは語った。

コミンテルンはトレーズの主張を支持した。その方針の唯一の修正は，1929年以来はじめて，ファシズムが共産主義革命とプロレタリアート独裁の到来以前のブルジョワ体制崩壊の最後で不可避的な段階ではないと認めたことであった。しかし，コミンテルンは，その各国支部にたいして，「社会民主主義の労働者たちと統一戦線を実現するために，社会民主主義の裏切り者の指導者たちを無視して粘りづよくたたかうよう」促し，「社会民主主義の偽善的で陰険な詭弁の仮面を大衆の面前でひとつひとつはぎとり，それを拒否することによって，共産党員は社会民主主義の労働者たちを共産党指導下の活発な革命闘争に引き寄せなければならない[162]」と主張した。

それでも，ドリオはかれの主張を変えなかっ

† 大阪大学名誉教授

[162] Maurice Thorez, Discours devant la XIIIe Assemblée plénière du Comité exécutif de l'Internationale communiste,《La situation actuelle en France et les tâches du PCF》, *International Communist*, 1934, pp.126-143;《Thèses adoptées par la XIIIe Assemblée plénière》, *Cahiers du bolchevisme*, 15 janvier 1934, pp.118-128, cit. par D. Wolf, *op. cit*., pp.95-96, 平瀬・吉田訳, p.100 et par J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.146.

た。1934年1月23－25日に開催予定のフランス共産党中央委員会のために，かれは「共産党指導部は，社会党支持の大衆がかれらの抱いている幻想を捨てるのを助けるために，統一戦線行動を社会党（SFIO）指導部にできるだけ早く提案すべきである[163]」という修正案を党指導部に提出した。しかし，このように，コミンテルン執行委員会によって採用されたばかりの決定とはまるで正反対の提案をしたとしても，党上層部のいかなる決定機関でも，ましてや中央委員会では，指導部に反対するドリオの議論に賛成するものがあると想像することなどはできなかった。ドリオがこのような常規を逸した態度をとったのは，かれがこのときすでに，もしかれの提案が採用されないならば，過去6年以上ものあいだ，セクト主義に陥り，凋落しつづけてきた党を見限ろうと決心していたからではなかったろうかとおもわれる。しかし，それでもなお，かれは，かれを支持しているとおもわれた多数の下部党員たちに，かれの主張を知らせなければならないと考えたのであったろう。

1月18日，党政治局は「中央委員会では，時間を制限せずにドリオにかれの意見をのべさせ」，トレーズが提出することになっている「冒頭報告では，名指しでドリオを攻撃しない」ことを決定した[164]。それにもかかわらず，トレーズは遠慮なくドリオの見解を激しく攻撃し，「党があまり前進できないでいるのは，社会民主主義にたいして断固とした徹底的な仕方で攻勢をかけていないからである・・・われわれは，いかなる場合も，社会党指導部，われわれが正当な理由によって敵とみなしている社会党（SFIO）との協定を求めたりはしない・・・統一戦線は目的ではなく，手段である。共産党の勢力を増大させ，その組織を強化できないような統一戦線はすべて，統一戦線ではない。それは茶番劇であり，社会民主主義への，また資本主義という敵への降伏である[165]」と主張した。

これにたいして，ドリオは1月23－25日の党中央委員会での発言のなかで，まず，共産党，統一労働総同盟（CGTU）とその付属組織の悲観的な情勢を説明し，このような状況の原因は，党が「革命的統一戦線強化の積極的要因」になることを妨げている「不十分で，不完全で，拙劣で，矛盾した」統一戦線戦術にあると主張した。さらに，かれは，ファシズムの台頭を前にしたコミンテルンの態度の豹変と不安定を糾弾して，このようなコミンテルンの態度が共産党の弱体化を招くと同時に社会党（SFIO）の立場の強化を可能にしているのであり，社会党（SFIO）内部では左派と中道派が激しく対立しているのに，共産党がそれにつけ込むことができないでいるのを残念におもうとのべた。そして，ドリオは，「われわれの眼前にファシズム勢力が頭をもたげています。農民，中産階級，小商人，知識人納税者などのあいだで，ファシズムの思想が熟し成長していることを示すさまざまな徴候がみられます・・・ファシズムとわれわれとのあいだで，すでに大衆を獲得するための闘いが始まっています。この闘いの勝負を決するとおもわれる社会階層の一部が，プロレタリアートにとって助力の源泉とならなければならないのに，反対にファシズムの後立てとして動員されてしまっています」とのべ，あらためて，「下部での統一戦線戦術だけでは十分ではありません・・・われわれの下部での統一戦線戦術をトップにたいする時宜をえた提案によって絶対に補わなければな

[163] Danielle Tartakowsky, Archives communistes, février-juin 1934, *Cahiers d'histoire de l'Institut de recherches marxistes*, no.18, 1984, p.28.
[164] Ibid.
[165] Maurice Thorez, *La lutte pour l'issue révolutionnaire de la crise*, Bureau d'éditions, 1934, pp.15 et 24, cit. par D. Wolf, *op. cit*., p.97, 平瀬・吉田訳, pp.101-102 et par J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.147.

りません」と提言して，スピーチを締めくくった[166]。

こうして，ドリオは，社会党（SFIO）への歩み寄りと中産階級の一部の獲得あるいはすくなくともその中立化によって，共産党が反ファシズムの大衆運動の先頭に立つべきであるという，コミンテルンの戦術と分析とはまったく異なる新しい方針を提示したのであった。かれのスピーチは，中央委員会の２人のメンバー，ギー・ジェランとルノー・ジャンによって支持されたようであった[167]。しかし，討論のゆくえは，コミンテルンの態度がすでに決定していた以上，決まっていた。トレーズは，「いかなる場合も，われわれが正当にも敵とみなしている社会党（SFIO），その指導部との協定」を求めるのは問題外であると反論し，台頭しつつあるファシズムとの闘いにおいて社会党（SFIO）と同盟を結ぶべきだというドリオの提案は，「日和見主義」と批判され，中央委員会のほとんど全員からの反対に遭った。

1934 年 1 月 31 日の『ユマニテ』紙は，「わが党の中央委員会内部においてさえも，社会党（SFIO）にたいするわれわれの政策の変更をねらう分派のいることがあきらかになった。たしかに，この分派はたったひとりの同志によって代表され，中央委員の全員一致によって反対されたが，しかし，この分派が危険であることにかわりはない。その論理的帰結が社会民主主義への降伏だからである」と主張し，「中央委員会は，第 13 回コミンテルン中央委員会総会のテーゼに賛同し，そのメンバーのひとりによって擁護された“日和見主義的方針”を弾劾した」と書いた[168]。しかし，同紙は，社会党（SFIO）指導部との話し合いによって，「下部での統一戦線戦術を補って完全なものにしようというドリオの提案を忠実に報告しようとはしないで，ドリオが統一戦線戦術を社会党（SFIO）指導部との「トップにおける」協定によって取り替えようとしていると非難して，かれの見解を歪曲した。そのため，ドリオはかれの提案を正確に党全体に知らせるよう要求したが，党指導部はそれを拒否した[169]。

ドリオがこの時期にコミンテルンと党中央委員会に路線の転換を提案する意志を固めたことには，ドイツの経験にたいするかれの判断，コミンテルンの硬直的な姿勢，フランス共産党が置かれたあらたな危機的状況などの要因が作用したのは疑いないが，それだけではなく，かれにそのことを決心させた重要な要因として，当時進行していた仏ソ接近の動きがあったとフィリップ・ビュランが指摘している。すなわち，フランスとソ連との関係は 1933 年秋に決定的な転換点を迎え，ドイツが 1933 年 10 月 14 日に国際連盟と軍縮会議からの脱退を通告したあと，仏ソ両国間で相互援助協定締結のための外交交渉が進んでいることを知ったドリオは，同協定の締結がコミンテルンにその革命的路線を清算させるだろうと考え，いわば先手を打とうとして，かれが長年にわたって求めてきた決定を実現するために，この特別な状況を利用し，方針の変更と党内討論の開始を要求して，コミンテルンに公然たるたたかいをいどんだというのである。しかし，のちにみるように，仏ソの外交的接近の結果，ラヴァル内閣時代の 1935

[166] Discours ronéotypé de Doriot au comité central des 23-25 janvier 1934, archives Pierre Dutilleul, *Archives municipales Saint-Denis*, 10 S 223;《Discours de Doriot au CC》, *La Vérité*, 30 mars 1934;《Les communistes de Saint-Denis et les événements du 6 au 12 février. Pour l'unité d'action!》, Lettre ouverte à l'Internationale communiste, p.10; D. Wolf, *op. cit*., pp.96-99, 平瀬・吉田訳，pp.101-104; Ph. Burrin, *op. cit*., pp.163-164.

[167] Doriot,《Saint-Denis et la discussion du parti》, *L'Emancipation*, 7 avril 1934.

[168]《Après le CC du Parti》, *L'Humanité*, 31 janvier 1934; Maurice Thorez, *Œuvres*, livre Ⅱ, t.5, Editions sociales, Paris, 1951, p.256.

[169] D. Wolf, *op. cit*., pp.99-100, 平瀬・吉田訳, p.104; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.148.

年5月2日に仏ソ相互援助条約が締結されるにいたるが，この条約と条約締結後のラヴァル＝スターリン共同コミュニケをドリオが激しく批判していることを考えれば，ビュランの推論を支持するのはむつかしいとおもわれる[170]。

いずれにせよ，こうして，ドリオは，1934年1月23－25日の共産党中央委員会の席上で，統一戦線戦術にかんしてコミンテルンを批判し，コミンテルンの方針とは明白に異なる新しい方針を提案するにいたったが，その前年の1933年12月末には，バイヨンヌ市営金庫を舞台にしたロシア生まれのユダヤ系フランス人，アレクサンドル・スタヴィスキーの証券偽造事件が発覚していた。急進党政権を覆す大スキャンダルに発展するこのスタヴィスキー事件は，事件そのものよりも，それが国会議員，有力政治家，官僚たちの日常的行動の裏面を暴いたことによって重要であった。急進党員の植民地相で前労相のアルベール・ダリミエが，保険会社にバイヨンヌ市営金庫の証券を引き受けるよう勧めた案内状に署名していたほか，急進党政権の閣僚をつとめていた有力政治家や多くの急進党議員がこの事件に関与していたことが分かり，一気にフランス国民のあいだに政府と議会にたいする不信と怒りが吹き出した[171]。パリ警視総監ジャン・シャップ（コルシカ出身で，キャップあるいはキャッペとも呼ばれた）もスタヴィスキーとつきあいのあったことが判明したが，かれは右翼のデモには寛大な一方で，左翼のデモは手厳しく取り締まることで有名な人物で，スタヴィスキーとの交際の事実があきらかになったために，左翼諸政党からのシャップ更迭の要求は強くなった。

スタヴィスキー事件は，最初から，急進党政権を攻撃するための武器として利用された。ダリミエ植民地相が辞任した1934年1月9日，下院が再開されたこの日，代表的な極右同盟のひとつアクシヨン・フランセーズがスタヴィスキー事件の機会をすばやくとらえ，パリ市民にデモに参加するよう呼びかけ，「泥棒どもをやっつけろ」の叫びとともに，政府と議会を非難するキャンペーンを始めた。この日以後，パリの街では，連日のように，アクシヨン・フランセーズを先頭として，極右諸同盟がデモを繰り返した。他方，パリ地域の多数の共産党活動家たちも，街頭デモを組織しようとして焦っていた。これにたいして，「いらだってはいけない」と題して1934年2月3日の『ユマニテ』紙に掲載された論説で，アンドレ・マルティは，下部党員たちのいらだちを非難し，「反ファシズムの闘いは，プロレタリアたちを軽率に興奮させ，実際にはわずかの人数しか集めることのできないデモを何度も繰り返しておこなうべきものではない」と主張した。このマルティの論説は，共産党員たちのなかに不審の念と驚きと混乱を引き起こした。

一方，ドリオは，1934年2月2日，極右諸同盟の騒乱の拡大にたいして，セーヌ県およびセーヌ・エ・オワーズ県の社会党（SFIO）県連と連携して対抗デモを組織するよう共産党政治局に提案していたが，アンドレ・マルティの論説が『ユマニテ』紙に発表されるや，かれは，サン・ドニ地区の党幹部たちの賛同をえたうえで，党指導部に手紙を送り，穏やかな言葉でではあったが，マルティの判断には賛成できないといい，共産党は「パリで大規模な大衆デモを組織して，行動のイニシャティヴを取り戻すべきである」という気持を伝えた。かれは，「このデモが本当に大衆デモであるためには，それが統一行動の旗印のもとに実現されなければならない。したがって，このデモは共産党員，統一労働総同盟（CGTU）の組合員，社会党員，労働総同盟（CGT）のメンバーの大多

[170] Ph. Burrin, *op. cit*., pp.165-167; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp.183-184.

[171] スタヴィスキー事件の詳細については，竹岡敬温『世界恐慌期フランスの社会－経済 政治 ファシズム－』御茶の水書房，2007年，p.82sq.

数を集めなければならない」と主張した。そして，ドリオは，共産党細胞と統一労働総同盟（CGTU）の下部組織が，極右諸同盟のデモへの対抗デモを共同で組織するために，社会党（SFIO）と労働総同盟（CGT）の下部組織と連絡を取るよう提案し，さらに，「中央委員会の最近の決定にもかかわらず，わたしは，わが党のパリ諸地域支部（1932年以後，共産党がパリ地域を分割した5つの管理地区）が社会党（SFIO）セーヌ県連に，そして統一労働総同盟（CGTU）連合が労働総同盟（CGT）連合に共同行動を呼びかけるよう提案する。この提案は，たとえば1）シャップの罷免，2）すべてのスタヴィスキー信奉者の懲罰，3）社会保険加入者から盗まれた金額の返済（賃金労働者は，経営者とともに社会保険に分担金を支払わなければならなかった），4）ファシスト極右同盟の解散，などを含む明確なプログラムにもとづいてなされなければならない」とつけくわえた[172]。

ドリオの提案には直接の回答はなかったが，共産党指導部は，最後には，ドリオが提案したように，党員たちに，2月6日にデモをおこなうよう呼びかけることを決定した。この日は，極右諸同盟が大規模なデモを組織することを予告していた日であった。2月5日，トレーズは，『ユマニテ』紙上で，翌晩の行動のために，「工場，駅でデモをおこない，われわれの勢力の一部をシャンゼリゼ大通りのロン・ポワン広場に送らなければならない。多数のデモをおこなうために，君たちの勢力を分割せよ」という指令をあたえた。2月6日『ユマニテ』紙も，「工場，建設工事現場，駅でデモをおこなえ」と繰り返した。しかし，この指令の不正確さや共産党のわずかな勢力を分割するという考えに，多くの党員たちは耳を疑った。「まるで，党指導部が存在しないかのようにすべての事態が進んだ」とのちにルノー・ジャンが3月14日の中央委員会で述懐している[173]。

1934年2月6日，1月30日に成立したばかりのダラディエ内閣が下院に出頭して信を問うたこの日，アクシヨン・フランセーズ，火の十字架団，フランス連帯団，愛国青年同盟，納税者同盟などの極右諸同盟が，スタヴィスキー事件のスキャンダルとシャップ罷免（左翼からのシャップ更迭の要求は強く，モロッコ総督への「昇進」を拒否したシャップは，結局，2月3日，ダラディエ首相によって罷免された[174]）に抗議して，下院のあるブルボン宮を取り囲んで激しいデモをおこなった。デモは流血の暴動と化し，1871年のパリ・コミューン以来，パリの街頭を舞台としたもっとも血なまぐさい遭遇戦となり，その結果は重大であり，死者15人，うちデモ隊側14人，負傷者1,435人にのぼった。しかし，この日，デモの始まる午後5時頃，シャンゼリゼ大通りのロン・ポワン広場以外には，共産党員の姿はみられなかった。共産党系の在郷軍人共和連盟（ARAC）がロン・ポワン広場にメンバーの集合を呼びかけていたのである。それはまた，まさしく，ドリオが，サン・ドニの多数の活動家たちの先頭に立ってデモをおこなうよう，バルベやマルシャルらかれの補佐役たちを送り込んだ場所でもあった。共産党の指令の混乱の結果，極右同盟と全国在郷軍人連合（UNC）の数万人を越えるメンバーたちのなかに埋没した数千人の共産党員のデモ隊は，やがて極右同盟と同じ反体制のスローガンを叫び，ときには極右同盟のメンバーたちと協力して警官隊と小競り合いを起こした。「統一戦線」ということをいうなら，この日，形成

[172] Lettre ouverte à l'Internationale communiste, op. cit., pp.11-12; Marty,《Pas d'énervement》, *L'Humanité*, 3 février 1934; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, pp.148-149.

[173] D. Tartakowsky, Archives communistes, février-juin 1934, op. cit., p.36. ルノー・ジャンはロ・エ・ギャロンヌ県出身の共産党代議士で，農業問題の専門家。

[174] シャップ罷免の経緯については，竹岡前掲書，pp.90-94.

されたのは，共産党員と「ファシスト」との統一戦線であった[175]。サン・ドニからきてデモに参加したバルベやマルシャル指揮下の共産党員たちは，指揮者の指令によってデモ隊の群衆から引き離されたあと，モンマルトルまで行進した。

この間，ドリオは暴徒に包囲された下院のなかにいた。かれは，ルノー・ジャンと協力して，トレーズに，翌日か翌々日には労働者階級の対抗デモを組織するために，ぜひ社会党（SFIO）指導部と連絡を取るよう要求した。トレーズは，この要求が1月の党中央委員会の決議に違反するとして，これを拒否し，かれが国会演壇で読むよう用意していたが，結局読むことができなかったつぎのような演説の原稿をみせることによって，2人の要求に返答した。「労働者階級は，ファシストとあなた方の腐敗した民主主義に反対して闘うであろう・・・ブルジョワ民主主義とファシズムとのあいだには，性質の違いはない。それは資本の独裁の2つの形態である。ペストとコレラとのどちらかを選択することはできない[176]。」この夜には，共産党政治局は，同じ理由で，ドリオの要求に反対し，また，2月8日の共同デモの準備を申し入れた社会党（SFIO）セーヌ県連の提案も拒否した[177]。

2月6日事件に続く日々，『ユマニテ』紙は事件の詳細な分析を掲載し，いま進行中のたたかいは，左翼勢力と右翼政力との対立ではなくて，労働者階級と政府権力との対立であり，政府と社会党（SFIO）こそが極右同盟の活動の拡大と2月6日の出来事の「真の責任者」であるとして，2月6日に極右諸同盟のデモ隊が首相ダラディエと内相フロ両名の名をあげて叫んだのとまったく同じ「銃殺の執行命令者，ダラディエ，フロ！」，「ダラディエ，フロを懲役刑に処せよ！」というスローガンを掲げた。2月9日の同紙は，「死者12人，負傷者1,100人，ダラディエ氏は労働者を軽率に扱い，行き過ぎた行動をした。ファシストたちがオペラ座広場でポリ公とたがいに手を組んで仲良くデモをしていたのをみれば，機動憲兵隊の銃弾がファシストたちに当たったのは，まったくの偶然であったのは確かである」というマルティの文章を掲載した[178]。ドリオは，のちに，「2月6日事件のこれ以上に不正確な分析はなく，ファシズム勢力をこれ以上に過小評価することは不可能である[179]」と主張している。フランス共産党のこのように驚くべき「現実からの乖離」は，なによりも，コミンテルンの指導と各国の現実との大きなずれが原因であったろう。ドリオは，コミンテルンの「不謬」の教義に現実が服従しなければならないことを容認できず，モスクワ起源の，現実からいちじるしく外れた観念論のこのような戯画的形態と，パリで直接体験された，もっとも基本的な具体的経験とのいちじるしい食い違いを許すことができなかった。

1934年の時点では，社会党（SFIO）にたいする態度をコミンテルンから押しつけられて決めていた共産党首脳部に反対して，早くから社会党（SFIO）との共同戦線の必要を主張して

[175] Marc Bernard, *Les journées des 9 et 12 février*, Grasset, Paris, 1934, pp.56, 61; D. Wolf, *op. cit*., p.105, 平瀬・吉田訳, p.110. 1934年2月6日事件を論じた邦語文献としては，平瀬徹也「2月6日パリ騒擾事件覚書」『史論』第35集，1982年, pp.98-122; 村上光彦「1934年2月6日」『歴史と社会』第3号，1983年11月, pp.157-189; 竹岡前掲書，pp.75-132; 竹岡敬温「フランス・ファシズムと火の十字架団（1）」『大阪大学経済学』第59巻第2号，2009年9月，pp.10-23.

[176] D. Tartakowsky, Archives communistes, février-juin 1934, op. cit., p.30.

[177] *L'Emancipation*, 28 avril 1934.

[178] *L'Humanité*, 9 février 1934.

[179] Lettre ouverte à l'Internationale communiste, op. cit., p.13. 第2次世界大戦後の1950年代になって，ルネ・レモンの一連の著作を皮切りに，フランスの現代政治史家たちによって，1934年2月6日の暴動がファシストの陰謀の結果であったとする主張は退けられた（竹岡前掲書，第16章「フランス・ファシズム論争」参照のこと）が，かといって，このときのドリオの主張を間違いであったと非難することはどうしてできようか。

いたドリオは，ドイツにおける共産党と社会党との分裂がヒトラーの権力掌握に有利にはたらいたと感じ，フランスでは同じ過ちを避けなければならないと願ったフランスでほとんど唯一の左翼の政治家であった。ファシズムの脅威に立ち向かうには，コミンテルンがその革命的セクト主義の路線を見直し，「階級対階級」戦術を放棄するほかはないと考え，社会党（SFIO）との統一行動の方向に踏み出そうとしていたドリオは，フランス共産党の指導者たちのなかで，その後のソ連外交の転換を正しく感知していたほとんどただひとりの人物であり，この点で共産党執行部のかれの反対者たちを数歩引き離していたのである[180]。

共産党の戦術転換を座して待つことができなかったドリオは，1934年2月6日の流血デモ以後，単独行動をとり，トレーズ・グループにたいして公然とたたかいを挑んだ。ドリオは，共産党の指令を無視して，サン・ドニの社会党（SFIO）リーダーたちと直接交渉を始めた。かれの目的は，2月6日の暴動に抗議するために，社共合同のデモをおこなうことであった。

2月7日には，ドリオは，共産党指導部の決定に反対を表明し，サン・ドニ地区の共産党に，社会党（SFIO）サン・ドニ支部によって提案された翌日の共同デモに参加するよう決定させることによって[181]，はじめて規律違反を犯した。このデモは，パリや他の地域でおこなわれることになっていたデモとともに，2月12日のゼネストへの労働総同盟（CGT）の呼びかけのあと，いっさいのデモを禁じた政府の集会禁止令におびえた社会党（SFIO）指導部によって最後の瞬間に中止されたが，いずれにしても，2月7日の晩，市立劇場で開催されたサン・ドニ地区の共産党の大集会で，ドリオはサン・ドニの労働者の下部組織から高まる統一への熱望のうねりをはっきりと知ることができた。

共産党指導部も，このような動きにとり残されまいとして，政府の禁止令を無視し，2月9日に独自のデモをおこなうことにして，労働者たちに同日午後8時にパリ10区の共和国広場に集合するよう呼びかけた。しかし，政府のデモ禁止によって激しい衝突が予想されたので，党政治局は，党の幹部たちに，逮捕を免れるために，パリ市外の安全な場所に身を隠し，デモには参加しないよう指令した。アンリ・バルベによれば，ドリオは「労働者たちを戦いに送り出し，自分たち自身はそこに姿をあらわさない」同僚たちの「臆病さ」に激しく抗議した[182]。2月9日朝，トレーズ，デュクロ，キャシャンらの共産党幹部は，労働者たちを「戦場」に送り込んだまま，自分たちは，逮捕を逃れるために，パリ郊外に身を隠し，トレーズは2月9日から12日までの4日間，フォンテーヌブロー近くのバルビゾンに隠れていた。かれらの臆病さにつよく抗議したドリオは，サン・トゥーアン地区の共産党書記であったバルベ[183]とともに，デモ隊（参加者の多くは，サン・ドニとサン・トゥーアンからやってきた）の先頭に立ち，数千人の労働者からなるデモ隊は，とりわけパリ東駅周辺とフォーブール・サン・マルタン街（パリ10区）で警官隊や機動憲兵隊と激しく対決し，その結果，4人の死者と数十人の負傷者が出た。ドリオ（ほかにマルセル・キャプロンとルノー・ジャンをつけくわえなければならないが）を除いては，共産党首脳部がまったくいないことは，多数の党員たちにはどうにも解せなかったが，反対に，それは

[180] Ph. Burrin, *op. cit*., p.160sq.

[181] Doriot,《Contre le fascisme grève générale》, *L'Emancipation*, 10 février 1934.

[182] *L'Humanité*, 8 février 1934; H. Barbé, *op. cit*., p.244.

[183] ソ連から帰国したアンリ・バルベは，サン・トゥーアンに職をみつけ，シトローエン工場の共産党細胞書記に，ついでサン・トゥーアン地区の党組織の書記になっていたが，サン・ドニの市会議員でもあり，ドリオやサン・ドニ地区の共産党員たちとつねに結束していた。H. Barbé, *op. cit*., pp.239-241.

サン・ドニ市長ドリオの人気を絶頂にまで高め，新聞紙上では，かれの名は「共産党指導部」と同義語になった。しかし，また，そのためドリオは警察から徹底的にマークされ，多くの警察報告が，「かれを対象にしてたえず繰り返される攻撃」に「うんざり」しているかれの様子を伝えている[184]。

2月9日以後も，ドリオは共産党と社会党（SFIO）を反ファシズム共同戦線に団結させようとする努力を続け，2月10日には，サン・ドニ地区の共産党と社会党（SFIO）は，2月12日にゼネストをおこなうとの共同アピールを公表した。それは，ドリオにとって，あらたな規律違反であった。翌日には，ドリオの提案で臨時「統一行動委員会」が設立され，同委員会には労働組合と両党の幹部たち――社会党（SFIO）2人，労働総同盟（CGT）2人，共産党と統一労働総同盟（CGTU）8人――が所属した。

一方，2月6日の暴動に抗議するため社会党（SFIO）系の労働総同盟（CGT）が呼びかけた2月12日のゼネストには，いっさいの共同デモを拒否していた共産党も――下部からの統一行動への圧力の下で，また，（のちにドリオによって非難されるように[185]）「社会党（SFIO）と労働総同盟（CGT）に引きまわされるままになって」，やがてやってくるはずの労働者のたたかいの勝利からひとりとり残されないためにも――ためらいがちながら参加した。この日，パリほかほとんどの大都市では，きわめて多数の労働者がストに参加し，フランスのいたるところで，「ファシズムの脅威」にたいする抗議集会が開かれた。パリのヴァンセンヌでの集会には，共産党も終わりの頃になって参加し，ポルト・ド・ヴァンセンヌからナシオン広場まで行進がおこなわれ[186]，ナシオン広場では共産党の隊列が社会党（SFIO）の隊列に合流し，社会党党首レオン・ブルムにつづいてマルセル・キャシャンが群衆に向かって演説した。

共産党と社会党（SFIO）の両党の党員たちは，両党の指導者たちがぼう然とみつめるなかで，「統一！」との叫びをあげることによってかれらの連帯を示した。もちろん，このように行動することによって，パリのデモ参加者たちは，ドリオの呼びかけに答えようとしたわけではなかったであろうが，それでも，かれらの行動は，社共両党のいずれからも提案されなかった潜在的な要求に先行し，こうして，共産党指導部にたいするドリオの象徴的な「強権発動」を後押ししたのであった。

ゼネストとデモの成功によって，1934年2月12日は記念すべき日となった。しかし，それにもかかわらず，共産党指導部の考えでは，この日のデモは偶発的なものであり，コミンテルンの戦術は変わったわけではなく，社会党はいぜんとしてブルジョワジーの前衛であった。共産党は，その非妥協的方針を放棄するまでにはいたらなかった。

1934年2月12日は，「赤い都市」サン・ドニにとってももっとも重要な歴史的な日となった。同地区の共産党と社会党（SFIO）の共同宣言が呼びかけたゼネストのために，すべての工場では，ストを断固やり抜くためのピケが張られた。店はほとんど閉じられ，午後も戸を開けなかった。市場も立たなかった。

午前10時，市立劇場で大集会が開催された。あまりに多くの群衆が押し寄せたので，演説を中継放送するために，スピーカーが劇場の外に，近くの労働組合センターと体育館に設置

[184] J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.151.

[185] Lettre ouverte à l'Internationale communiste, op. cit., pp.14-15.

[186] しかし，ドリオは，ナシヨン広場に通じるヴァンセンヌ大通り（パリ20区）での2月12日のデモにサン・ドニの党員たちを動員せよという共産党書記局の要請を拒否していた。*Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, pièces des 10 et 13 février 1934.

された。労働総同盟（CGT）の１人，社会党（SFIO）の２人を含む８人の演説家が，イタリアとドイツの例を引用し，ファシズムに反対して労働者階級が団結すべきことを訴えた。最後に，聴衆すべてが立って歌う「インターナショナル」の高揚した響きに迎えられて，ドリオがスピーチをおこなった。「この国で，火の十字架団やその類いの団体を野放しにしていることはできません・・・わたしはつぎのことを約束したい。もし，この統一行動を壊そうとする者がいるなら，かれらを労働運動から追放し，根絶やしにすることを誓わなければなりません（長い拍手喝采）。わたしは，このことに，政治家としての責任をとります。わたしが労働総同盟（CGT）の同志と社会党（SFIO）の同志に要求するのは，一方的な約束ではありません。もし，われわれの組織のなかに，統一行動のために全力をつくそうとしない者がいるならば，わたしは，まっさきに，その人物とたたかい，わが地区の労働者階級にその人物を押しつぶしてしまうよう忠告するでしょう（長い拍手喝采[187]）。」ドリオの言葉は，共産党執行部との関係断絶を示す最初の合図であった。

共産党執行部の態度への当てこすりはあきらかであり，威嚇的でさえあった。ドリオは大衆の熱狂的賛同に力をえたのであった。ついで，かれは，２月 11 日に設立された「統一行動委員会」に代えて，「反ファシズム監視委員会」を創設することを拍手によって正式に承認させた。それは「いってみれば，サン・ドニの労働者階級の反ファシズム運動を指導する委員会となる」常設機関であった[188]。

午後３時 30 分には，市立劇場ではあらたな集会が召集され，いっそう多くの参加者が集まった。集会終了後，共産党および統一労働総同盟（CGTU），社会党（SFIO）および労働総同盟（CGT）との両者の代表によって指揮された大規模なデモが始まった。巨大なデモ隊は，サン・ドニの街をひとまわりしたあと，市役所前広場に集結した。デモ隊はバルベによって率いられたサン・トゥーアンの 2,000 人のデモ隊と合流し，おそらく 5,000 人ないし１万人（『解放』紙と『ユマニテ』紙によれば１万 5,000 人，バルベの『回想録』によれば２万 5,000 人）にふくれあがった。市役所のバルコニーからは多くの演説家たちがこの日の総括をし，名状しがたい熱狂的雰囲気のなかで，ドリオが「唯一の労働者階級，唯一の労働総同盟（CGT），唯一の労働者の党」とのスローガンを叫んだ[189]。

この２月 12 日の出来事が進行中であったときの共産党指導部の態度を，ドリオは，すこしのちに，４月に公表されることになる「コミンテルンへの公開書簡」のなかで，つぎのような言葉で厳しく批判している。「この途方もない社会的戦闘において，断固とした決定をおこない，イニシャティヴを取ったのは，またもや改良主義者と社会党でした。大衆は社会党指導者たちを無視してわれわれ共産党とともにデモをしようとしているというトレーズの主張は，党にとってはきわめて重大な誤りです。議論の余地ない歴史的事実は，２月 12 日という日がすべての組織とその指導者たちがともに参加した統一行動の日であったということです。これらの指導者たちは，統一行動から逃げようとはしませんでした。その事実とは逆のことを主張するならば，それは，改良主義を，多数の民衆にたいするその影響力を，今日のその行動能力を危険なほどに過小評価することになります。この過ちは，２月の出来事を前にしてファシズム

[187] Cit. par J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.152.

[188] Marschall,《Unité d'action. Aujourd'hui et demain!》, *L'Emancipation*, numéro spécial du 13 février 1934.

[189] *L'Emancipation*, numéro spécial du 13 février 1934; *L'Humanité*, 13 février 1934; H. Barbé, *op. cit*.; D. Wolf, *op. cit*., pp.109-111, 平瀬・吉田訳, pp.111-114; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp.151-153.

を過小評価するという過ちと同性質のものです[190]。」

多数の都市で，サン・ドニと同様に，反ファシズム監視委員会がさまざまな名称の下に設立され，多くの場合，これらの委員会が2月12日のデモを指揮した。ドリオは，「萌芽的で，きわめて不完全な形態の下でではあるが，これらの委員会は明日の革命的闘争の指導機関をあらわしています。実際，それらは革命的動向の初期における大衆運動の最初の指導機関であり，大きな革命的役割を担っているのです」として，これらの委員会の重要な役割を認めている。そして，それにもかかわらず，共産党指導部は「これらの委員会にたいして，セクト主義的で，ときには敵対的な態度を取りました」とドリオは主張している[191]。

実際に，それはサン・ドニで起こったことであった。2月13日の『ユマニテ』紙は，「赤い都市サン・ドニでは，街は労働者の手に」と題して，サン・ドニで起きた出来事を手短かに報告するだけにとどめ，同市に創設された反ファシズム監視委員会のことにはまったくふれなかったが，まもなく，同委員会の原則が共産党書記局によってつよく非難されるようになった。すなわち，数日後，党書記局の責任者のひとりブノワ・フラションが，その演説のなかで，ファシズム監視委員会を「労働者階級にたいする犯罪」であるとの意見を表明し，その解散を要求するまでになったのである。しかし，この解散要求は断固拒絶された[192]。若干の中央委員会のメンバーは，ドリオの行動は容認できず，「共産主義運動にとって危険」であり，したがって，ドリオを，まず政治局から，ついで党から排除すべきであると主張した。しかし，党指導部，とりわけトレーズとデュクロは，ドリオの除名が下部党員のあいだに引き起こすであろう動揺を心配し，さらに，首脳部においては，有名党員のルノー・ジャンや在郷軍人共和連盟（ARAC）の書記長ギー・ジェランのような，社会党（SFIO）との統一戦線の実現をめざすドリオの主張に賛同するようになっていた人びと[193]の離党を恐れて，事態の処理を急ごうとはせず，あわてずに事を進め，「策略」によって，ドリオを孤立させ片づけなければならないと考えたようであった。

一方で，ドリオは多数の社会党員によって支持された。1934年2月13日の社会党（SFIO）機関紙『ル・ポピュレール』は，反ファシズム監視委員会の発足と，政党および労働組合間の統一行動とにかんする記事に2ページを割き[194]，以後，同紙は，サン・ドニで実現された計画を全国に広めていこうとした。統一戦線戦術をめぐってドリオとトレーズを対立させていた共産党の党内抗争にたいする『ル・ポピュレール』紙の論調は，多くの場合，中立的であったが，しかし，その中立的な論調のなかで，同紙がトレーズよりもドリオを支持していることを読み取るのは容易であった。このように，共産党指導部とのたたかいのなかで，ドリオは社会党（SFIO）の指導者たちの支持を受けたが，しかしながら，かれらの支持に幻想を抱くことはできない。その後，共産党との統一行動の方針に賛成することによって，社会党（SFIO）指導者たちは，ドリオの領分を急速に奪い，かれにはまったく副次的な場所しか残さ

190) Lettre ouverte à l'Internationale communiste, op. cit., pp.15-16.
191) Ibid., p.18.
192) D. Wolf, *op. cit*., pp.105-112, 平瀬・吉田訳, pp.109-115; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, *op. cit*., p.153; R. Soucy, *op. cit*., pp.209-210, (traduction française) *op. cit*., p.300.
193) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, pièce《Correspondance-11》du 17 février 1934; Lettre ouverte à l'Internationale communiste, op. cit., pp.19-20; D. Wolf, *op. cit*., pp.112sq., 平瀬・吉田訳, pp.114sq.; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp.153-154.
194) *Le Populaire*, 13 février 1934.

なかったからである。換言すれば，ドリオの社共統一への呼びかけは，まず社会党（SFIO）によって，ついで共産党によって利用され，こうして，かれの予言者的地位は完全に簒奪されたのである。

ドリオを追放するための共産党指導部の「策略」は，時機の到来を待ちながら，まず，ドリオの主張がサン・ドニ以外に住む下部党員たちに知られないようにしたことであった。ドリオは全国の党員たちにかれの見解を訴えたいとの意向をあきらかにしていたが，党政治局は，トレーズの教唆によって，ドリオの論説を『ユマニテ』紙に掲載することを拒否し，かれが党の集会で意見を表明することを禁じた[195]。

また，党政治局は，ドリオの行動を支持していた『ユマニテ』紙の発行責任者モーリス・クレロワが，同紙の発行責任者として，一連の裁判によって合計 14 年の禁錮刑と 2 万 7,000 フランの罰金刑の宣告を受けたことをこれ幸いとして，クレロワの立場を歪曲し，その信用を失墜させようとした。クレロワは辞任し，その辞任状のなかで，つぎのような文章で，1934 年 1 月以来，ドリオに反対するために『ユマニテ』紙がとってきた方法を非難した。「1 月以来，『ユマニテ』は，サン・ドニ地区の意見と行動について虚偽の情報を発表してきました。わたしは，サン・ドニ地区に反対するキャンペーンが『ユマニテ』の公式的論説のなかに含まれた政治的虚偽から始まったという，明白な証拠を差し出す用意があります。1 月以来，40 を越す論説のなかで，多くは幹部党員である『ユマニテ』の執筆者は，サン・ドニ地区の政治姿勢について，この国の労働者階級にぬけぬけと嘘をついてきました・・・『ユマニテ』はまた，本年初頭には，党のセクト主義的政策に反対するサン・ドニの細胞や同志の 100 以上の決議や書簡を掲載するのを拒否しました・・・労働者階級の統一を望んだことが唯一の犯罪である組織と人びとの信用を失わせるためには，いかなる手段も辞そうとはしない新聞の発行責任者としてとどまるなど，とてもできることではありません。」この辞任状の文章は，『ユマニテ』紙を除くほとんどすべての新聞に掲載された[196]。

さらに，1934 年 9 月には，ドリオの立場に賛成した『ユマニテ』紙の編集幹事モーリス・ルブランが，ドリオの協力者アンリ・バルベと同時に除名された。こうして，『ユマニテ』紙は陰険なキャンペーンを展開しつづけ，「日和見主義」，「社会民主主義とトロツキズムへの偏向」，「ブランドラー[197]的姿勢」を立て続けに攻撃し，「バルベ・グループの残党」の有害な活動やシモン・ロラン（冶金業統一労働組合地方支部書記，元共産党中央委員）の社会民主主義的，ブランドラー的態度を非難した。サン・ドニの 35 の細胞中 30 までがドリオ支持を宣言していたが，『ユマニテ』紙は，党中央委員会に忠実な細胞の決議だけを掲載した。

党上層部でドリオを孤立させる計画がすでに始まり，党の決定機関におけるかれの影響力はきわめて小さくなっていた。2 月 6 日以後，政治局の会合には 1，2 度しか出席しなくなっていたドリオは，3 月 14 日の中央委員会の会議に出席して，1 月末と同じ主張を展開した。ギー・ジェランとルノー・ジャンだけが，ファシズムを出し抜くには社会党（SFIO）勢力との統一戦線を結成しなければならないというかれの意見に同調した[198]。しかし，いずれにしても党を去るつもりがなかったルノー・ジャンは，結局，かれにたえず加えられた政治的，情

[195] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, pièce《19 février 1934》.

[196] *L'Emancipation*, 22 septembre 1934.

[197] ドイツ共産党の指導者であったブランドラーは，1923 年に，ザクセンで，社会民主主義の左派分子が参加した「労働者政府」を設立し，コミンテルンによってつよく非難され，ドイツ共産党から除名された。

[198] D. Tartakowsky, Archives communistes, février-juin 1934, op. cit., pp.36-39.

緒的圧力に屈したようであった。ドリオが欠席した3月15日の中央委員会では，「社会ファシズム」に反対してたたかうという方針が再確認された。

党指導部にとっては，離反を地方レヴェルに抑え込むことが必要であったので，2月半ば以降，ドリオをかれの「領地」に閉じ込めるために，多数の中央委員会メンバーがパリ北地域の多くの地区組織に赴き，説得活動を開始した。こうして，3月10－12日，サン・ドニで開催された地区会議で，3日間の討議のあと，同地区の代表たちの少数派（39パーセント，110票にたいして61票）がドリオの進めようとする統一行動政策に賛同するのを拒否した。この3週間後の4月1－2日には，サン・ドニで召集されたパリ北地域の会議は，54票対84票で，ドリオを非難するトレーズの決議を可決した。

4月6日の『ユマニテ』紙に発表された「プロレタリアートの革命的統一をめざして，前進せよ，サン・ドニ，前進せよ，全共産党」と題する長文の論説のなかで，トレーズは，サン・ドニ地区とパリ北地域の会議の投票結果は示さないまま，「サン・ドニ地域の共産党員の堅固で正しい姿勢」を繰り返して力説し，つぎのように強調した。「社会党支持の労働者たちは，成人も青年も，共産主義とモスクワに救いを求めている。ところが，このようなときに，少数の日和見主義者たちは，わが党にたいして，下部での統一戦線の政策を放棄し，社会民主主義との連合政策を実行するよう“提案”しているのである。このようなときに，かれらは，要するに，ボルシェヴィズムの立場を放棄し，社会民主主義の呕吐物のなかに落ち込むよう，われわれを誘っているのである。これにたいして，サン・ドニ地域の共産党員の代表たちの大部分は・・・かれらの発言のなかで，社会民主主義的，トロツキズム的偏向にたいして，そして分派的陰謀とこのような偏向の少数の擁護者たちの公然たる規律違反にたいして，ためらうことなく，はっきりと憤りの言葉を浴びせたのである[199]。」そして，トレーズは，地域会議が採択した決議文の一節を引用して，「会議は，党を政治的に統一し，その決定を全党員に適用するために，中央委員会にたいして，同志ドリオにかれの日和見主義的見解を広めることを禁止し，かれを党の規律に従わせるよう要求した」とのべ，ドリオの名をあげて非難したのである。

ドリオは，党の中央機関紙でかれの実名をあげて批判されているのを知るや，4月7日，サン・ドニ地区の共産党機関紙『解放』に「サン・ドニと党内論争」と題した長文の論説を発表し，そのなかで，「『ユマニテ』の不正確なキャンペーンを反論せずに放置しておくことはできない」として，共産党指導部とかれとの対立について，その起源からその後の展開まで，くわしく語った。そして，「党指導部は，ふつうなら党全体に広げられるべき討論を拒否した・・・党内で自由に論争するのが好ましいが，それを望まなかった。公の場で討論するのが必要であるにもかかわらず，それは最悪だとされた。ワインの栓はあけられた。それを飲まなければならない・・・われわれはモーリス・トレーズの独り言が続くのを放置しておくことはできない。それはもう3か月間も続いてきたのである」とのべて，論争を公開しておこなうべきだと主張した[200]。『解放』紙は，ただちに討論のための「論壇」を開設し，失った時間を取り戻さなければならないとして，党内討論と党内民主主義の欠如，党指導部がとってきた方法を雄弁に非難した。さらに，ドリオは，トレーズがドリオの支持者たちを「異端」と非難したのにただちに反応して，4月9日，サン・ドニ市長と市会議員を辞職し，あらためて市民

[199] Thorez,《Pour l'unité révolutionnaire du prolétariat: En avant Saint-Denis! En avant tout le Parti communiste!》, *L'Humanité*, 6 avril 1934.

[200] Doriot,《Saint-Denis et la discussion du parti》, *L'Emancipation*, 7 avril 1934.

の審判を受ける決意をした[201]。

3月10－12日に開かれたドリオ支持派のサン・ドニ地区共産党集会では，過半数（反対55にたいして120）の賛成をえて，コミンテルンに正しい情報を知らせて訴えるべきだとする動議が採択されていたのを受けて，4月9日には，「サン・ドニの共産党員と2月6－12日の出来事，統一行動のために。コミンテルンへの公開書簡[202]」と題したパンフレットが3万部印刷された。その最後のページには，在郷軍人共和連盟（ARAC）書記長のギー・ジェランを含む45人の署名が並んでいた。書簡のオリジナルは数百人の署名で覆われ，4月9日の日付では，600人近い同志が署名したという[203]。4月11日，公開書簡は，モスクワへの転送を望むとして，共産党政治局に送られた。

「コミンテルンへの公開書簡」は，フランス全国とサン・ドニにおける1934年2月の出来事の正確で詳細な分析からなり，その後のドリオにとって，共産党指導部とたたかうための基本綱領となった。そのなかで，ドリオは，ファシズムの脅威が現実のものになっているとして，「ファシズムとわれわれとのあいだでは，すでに大衆を獲得するための闘いが始まっています。この闘いの勝負を決するとおもわれる社会階層の一部が，プロレタリアートにとって助力の源泉とならなければならないのに，反対にファシズムの後立てとして動員されています[204]」という，1月23－25日の党中央委員会でかれがおこなった発言を繰り返し，党指導部の犯した多くの誤りと，それとは対照的に，かれ自身がとった態度の正当性とサン・ドニでえられた成功を強調していた。

「書簡」は，賃金労働者の利益のために取られるべき諸措置（週40時間労働，政府の費用での失業保険，いっさいの賃金ないし年金カットへの反対など）を提案した政策綱領で終えられていたが，その綱領は，つぎのような点で斬新であった。1）社会党（SFIO）と労働総同盟（CGT）の綱領をモデルにした構造改革（銀行，保険，鉄道，鉱山，大規模商工業企業の事実上の国有化），2）農民と中産階級の利益のための一連の提案[205]，3）とりわけ，綱領の末尾に，「ソ連邦の積極的防衛」あるいは「無条件支持」などの従来の合言葉に代えて，「ソ連邦との同盟政策」という語を使用していたこと。

「書簡」は，このように，ソ連にたいする無条件支持の「拒否」をあきらかにすることによって終えられていたのである。それは共産党員には考えも及ばないことであり，それはすでにモスクワにたいする「宣戦布告」であった[206]。

共産党員が，その言説のなかで，「ソ連邦との同盟政策」を提案することは，それだけで，すでに正統性から外れた立場に身を置くことを意味していた。各国の共産党がモスクワにたいしてなにがしかの自立性を要求するという可能性は，フランス共産党の初期段階の歴史にお

---

[201] D. Wolf, *op. cit*., p.117, 平瀬・吉田訳, p.119.

[202]《Les communistes de Saint-Denis et les évenements du 6 au 12 février. Pour l'unité d'action!》, Lettre ouverte à l'Internationale communiste, op. cit. この公開書簡はパリにある国立図書館とパリ警視庁文書館にそれぞれ1通保管されている。*Bibliothèque Nationale* et *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, 28 avril 1934.

[203]《Pour l'unité d'action. Histoire d'un crime…》, *L'Emancipation*, 14 avril 1934; J.-P. Brunet, *Saint-Denis, la ville rouge, 1890-1939, op. cit*., p.377; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.158.

[204] Lettre ouverte à l'Internationale communiste, op. cit., p.10.

[205] ドリオが中産階級のための諸措置を推奨したことについて，ディーター・ヴォルフが，「ドリオは潜在的にフランス・ファシズムの要素になりうると認めた中産階級のなかから支持者を集めようとした」と書いているが，それは時代錯誤であろう。そんなふうにいうなら，1935-1936年のトレーズも，人民戦線を形成する諸政党も，プレ・ファシストとみなされることになろう。D. Wolf, *op. cit*., p.118, 平瀬・吉田訳, p.120; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.517, note (19).

[206] Victor Barthélemy, *Du communisme au fascisme. L'histoire d'un engagement politique*, Albin Michel, Paris, 1978, p.60.

いては，断固として排除されてきた。しかし，「書簡」には，世界で普遍的に適用されるべき方針がモスクワで権威主義的に決定されてきたことへの異論と，各国独自の状況をもっと考慮することが必要であるとの明確な主張がはっきりと読みとれた。ドリオは，「ソ連邦との同盟政策」の実行を提案することによって，モスクワの「雇人」よりはむしろ，その「同盟者」になりたいという意志を表明したのである。しかしながら，「ソ連邦との同盟政策」というスローガンを明示すること自体，コミンテルンにとっては重大な異端の合図であったろう。ドリオはそのことをよく承知していた。それは，かれがもはやコミンテルンになにも期待せず，コミンテルンの仲裁を求める公的な訴えが，たんに国内における情宣活動をはなばなしく引き立たせるためにほかならないことを示す証拠だったのではなかろうか[207]。

コミンテルンは判決を下した。その執行委員会から4月21日に届いた電報は，「フランス共産党政治局，トレーズおよびドリオへ。われわれは党内抗争をやめることが必要だと考える。こちらにドリオとトレーズを送られたい。コミンテルンは，フランスの党の党内不一致を検討する。2人がいつ出発するか，知らされたい」と書かれていた。ドリオにとっては，かれがトレーズと同列に置かれているのは，半ば勝利したも同然であったろう。ドリオがモスクワにいっていたならば，かれがトレーズに勝っていたかもしれない。いくにんかの人びとはそのように考えていた（アルベール・ヴァサールやアンリ・バルベがかれらの回顧録のなかでそう語っている）が，しかし，かれらは，たとえモスクワがドリオにフランス共産党の指導を委ねたとしても，それは，たとえば集団指導制やなんらかの集団監視体制をつうじて，かれを注意深く監督することによってであり，いずれにしても，それは一時的な解決策にすぎないと考える点で一致していた。ドリオ自身はすでに自分が党とコミンテルンから排除されているとおもい，「かれがコミンテルンの好意をすでに失っていて，モスクワでは，ドリオの聡明な方向転換よりトレーズの馬鹿げた規律のほうが尊重されるであろう」と信じていた[208]。そのため，ドリオはモスクワにいこうとはしなかったのである。

ドリオは，サン・ドニで5月6日におこなわれる予定の市会議員選挙を口実にして，時間稼ぎをしようとし，選挙戦が終わるまえにフランスを不在にすることはできないと返答した。ドリオはコミンテルンにかれに反対する党指導部のキャンペーンをやめさせ，「いっさいの議論に先立って，サン・ドニ地区多数派にとって必要な修正を党指導部に受け入れさせる」よう要求した[209]。4月26日，コミンテルンはふたたびトレーズとドリオに「いきすぎた党内抗争をやめる」よう要求し，ドリオにたいしては，かれの除名問題は提起されてはいず，モスクワへの出発を選挙が終わるまで延期することを承認するとつけくわえた。一方，トレーズは，党政治局の決定にもとづいて，4月26日夜，モスクワに出発した[210]。

ドリオは，選挙戦を続行し，かれの見解を広範に伝えることによって，かれの立場を強化しようとし，5月2日のサン・ドニ地区の集会では，党指導部が党の刊行物に掲載された誤った情報を訂正し，「自由な討論」を開始するために全国的な会議を準備し，2月以来，サン・ドニ地区にたいして犯してきた過ちを公に認めるという，即刻党指導部が果たすべき条件をあきらかにした[211]。それは党指導部への降伏要求であった。ドリオは，コミンテルンの妥協的態度

[207] J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.159.

[208] André Thirion, *Révolutionnaires sans révolution*, Laffont, Paris, 1975, p.395.

[209] 《L'Internationale a parlé!》, *L'Humanité*, 19 mai 1934.

[210] 《Doriot répondra-t-il?》, *L'Humanité*, 24 mai 1934.

[211] *L'Emancipation*, 5 mai 1934.

に勇気をえて，あり金全部を賭けて勝負しようと決意したのであろうか。それとも，コミンテルンや党指導部にはもはやなにごとも期待せず，実現の不可能なことがあきらかな要求をつきつけることによって，かれの強固な意志を示そうとしただけなのであったろうか。

5月6日の市会議員選挙の投票は，ドリオの表現によれば，統一戦線政策にたいする真の「国民投票」であった。ドリオは，4月9日の市議会で市長と市会議員を辞職すると申し出たとき，かれと対立するようになっていた数人の共産党議員たちにたいして，意見の対立を有権者の審判によって決着させるためにも，かれとともに辞職するよう促していたが，党中央委員会を支持する3人の議員は同意せず，辞職を拒否していた。したがって，ドリオと死亡したりサン・ドニを去ったりした他の3人の議員との4つのポストについて，選挙がおこなわれることになった。しかし，実際には，共産党サン・ドニ地区が立てたドリオの率いる4人の候補者しか登録されなかった。社会党（SFIO）は共産党候補のリストに投票するよう呼びかけたが，リュドヴィク・バルテレミーと右翼は棄権の指令を出していた。共産党中央委員会も，同じく，「中央委員会の正しい路線に賛同させ，サン・ドニの共産党員たちの日和見主義を糾弾させる絶好の機会だ」（5月5日の『解放』紙上でドリオが揶揄した言葉）として，ひそかに党中央委員会の支持者たちに棄権を指示した。

このような状況のなかでおこなわれた5月6日の投票の結果は，ドリオが1万1,949票（登録有権者の57.6パーセント，1932年の選挙の得票数より1,500票増加）を獲得し，かれにとってあきらかな勝利に終わった。ドリオは「統一行動のためのたたかい，統一戦線の正しい政策はわれわれの地域の境界を越え，国全体に問題は提起された」との声明を発表した[212]。5月12日の『解放』紙は「1万2,000票が統一行動に賛成」との5段抜きの見出しを掲げ，5月13日には，27票対1票でドリオが市長に再選された。

5月6日の投票日の夜には，ドリオは，その演説のなかで，統一行動のためにフランスでいそいでとりかからねばならない仕事があることを強調したが，しかし，まだモスクワにいく可能性を明確に退けてはいなかった。5月10日には，「あなたは，コミンテルン執行委員会によって召喚されているのに，モスクワへくるつもりはあるのか。イエスかノーで答えよ」という，コミンテルン執行委員会からのあらたな電報がサン・ドニにいたかれのもとに届いた。ドリオはなお言を左右にし，多数の統一行動のデモに参加しなければならないことを口実にして，モスクワへの出発をあらためて5月末まで延期したいと申し出た。そして，かれは，パリ近郊のコルベイユ（セーヌ・エ・オワーズ県）の集会で，「わたしはコミンテルンの指導者と対等に議論しにいきたい。シャツを着て，首に綱をつけられた14世紀のカレーの市民のような恰好でモスクワにいこうとはおもわない。この3か月間，党機関紙上で，中央委員会の活動家たちによって，わたしについてまき散らされた中傷と虚言をコミンテルンの指導者たちが否認し訂正してくれたときにのみ，わたしはモスクワにいくであろう[213]」と言明した。

「コミンテルンと対等」という要求は，ドリオがずっと以前から心の奥底に抱きつづけていた思いであった。さらに，その数日後，ドリオが，コミンテルンにはすべての説明を文書にして送ってある（「公開書簡」のことである）ので，コミンテルンは，「わたしがモスクワまで旅行しなくとも，その政治的判断を下すことができよう」と主張し，コミンテルンからの召喚は「われわれに反対するたたかいの巧妙な形

[212] Doriot,《Les leçons du scrutin de dimanche》, *L'Emancipation*, 12 mai 1934.

[213]《A Corbeil-Essonnes, l'unité d'action remporte un gros succès》, *L'Emancipation*, 19 mai 1934.

態」にほかならないことをほのめかして，出頭命令に従うことを公然と拒否するにいたった[214]とき，かれの規律違反と党およびモスクワとの関係断絶の意志は明白となった。

5月16日，コミンテルンは決定を下した。コミンテルンは，ドリオが，統一戦線にかんする空疎な言葉を隠れみのにして，党の分裂をはかったと非難し，党指導部が必要と判断する措置をかれにたいしてとることを承認した。

以後，ドリオはサン・ドニのかれの領地のなかに孤立した。たしかに，かれはサン・ドニ地区の共産党員たちの大多数と市会の支持を受けていた。サン・ドニの労働者たちは，かれへの支持を惜しまなかった。4月28日の市立劇場で開催された政治討論会には，数日間にわたって『ユマニテ』紙が通報した結果，全パリ地域の共産党員たちが，当時モスクワにいっていたトレーズを除く党の指導者全員に引き連れられて，貸切りバスに乗り，大挙して押しかけた。会場は名状しがたい大騒ぎになったが，しかし，サン・ドニのドリオ支持者たちは屈伏せず，党指導部はこのような討論会に参加したことを後悔しなければならなかった[215]。

しかし，ドリオは，サン・ドニから一歩外へ出るや，もはや中途半端な歓迎しか受けなかった。5月27日のペール・ラシェーズ墓地の連盟兵の壁（1871年，ここでパリ・コミューンの兵士が処刑された）の前でおこなわれたデモには，ドリオはサン・ドニの多数の労働者たち（『解放』紙によれば3,000人）のデモ隊を伴って参加したが，かれの支持者たちが唱える「ドリオは正しい」というスローガンに答えて，「モスクワに行け」という共産党指導部に忠実な活動家たちの叫びが返ってきた[216]。「それは，もはやサン・ドニの勝利ではなかった。連盟兵の壁に向かって墓地を昇っていくドリオとその仲間たちの姿は，ゴルゴダの丘を昇っていくキリストを想わせた。たとえドリオが巨大な十字架を背負う姿をみたとしても，だれも驚かなかったであろう」（アンドレ・ティリヨン[217]）。

この頃には，5月16日のソヴィエト最高会議幹部会で正式に採択された決定がモスクワからフランス共産党政治局に届けられていた。そのなかで，コミンテルンでソ連共産党を代表していたディミトリ・マヌイリスキーが，モーリス・トレーズにたいして，つぎのような文章で，反ドリオ・キャンペーンをいかにおこなうべきかを説明していた。

「1）『ユマニテ』は，労働者階級と党のメンバーに，とくにサン・ドニの労働者たちに，コミンテルンがドリオを党内にとどめるためにできるかぎりのことをしたということを示すために，われわれが打ったすべての電報の内容を公表しなければならない。

2）わが党は，その行動と情宣活動によって，つぎの事実を強調しなければならない。すなわち，ドリオはコミンテルンに訴え出たということである。だれかに訴えるのは，その仲裁を望んでいるからである。コミンテルンは，この仲裁役を引き受け，問題の根本について，すなわち統一戦線戦術について討議するためにこちらにこられたい，そのあとでわれわれは決定を下すであろう，という電報を打ったのである。コミンテルンに訴えたあと，ドリオは選挙活動にはいってしまった。だから，サン・ドニの労働者たちは，ドリオがいぜんとしてコミンテルンに忠実であり，コミンテルンの調停を受け入れようとしているのだと信じ込んだ。ところが，選挙のあと，なにが起こったか。かれがコミンテルンと関係を断ったも同然になったということである。かれは労働者たちの信頼を悪用した

[214]《Manœuvrer, isoler, liquider》, *L'Emancipation*, 26 mai 1934.
[215] *L'Emancipation*, 28 avril 1934; *L'Humanité*, 27 avril 1934.
[216] D. Wolf, *op. cit*., p.122, note 1, 平瀬・吉田訳, p.140, 注（30）; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.162.
[217] A. Thirion, *op. cit*., p.397.

のである。したがって，われわれのなすべきもっとも重要な仕事は，サン・ドニを征服することである。

3）党は，その情宣活動とその論説によって，フランス共産党が，（社会党の）指導者たちとの話し合いが不可能であるという状況においても，けっして統一戦線の反対者ではなかったとはっきり表明しなければならない。そのことをわたしはつよく強調したい・・・あなたは，話し合いに反対してはいなかったのであり，適切な状況が到来していなかったためにそれができなかったのであるということを強調しなければならない・・・あなたは受け入れがたい条件を提起すべきではない。一般に，わが党は受け入れることのできない条件を提起する習慣と傾向があるが，あなたは社会党の労働者たちが受け入れることのできる条件を提起すべきである。われわれが関心をもっているのは，社会党の労働者との共闘である。

あなたがこのような方法を用いるならば，一定の期間がたてば，あなたはドリオの影響を一掃できるであろうと，わたしは確信している。もしあながたこのような方法を用いることができないならば，ドリオはいつまでもあなたを統一戦線の反対者といいつづけるであろう。したがって，絶対に，そのようなことにははっきりとけりをつけなければならない[218]。」

重要なことは，微妙な表現ながら，この文面から，コミンテルンが社会党（SFIO）にたいする戦術の転換をすでにはっきり考えはじめていたことが読み取れるということである。そして，ドリオの反逆が，ちょうど都合のよいときに（あるいは予想よりもすこし早く），突然やってきた戦術転換の機会となったということである。もし，この推論が正しければ，ドリオがコミンテルンに反逆しないでモスクワにきさえすれば，コミンテルンはドリオの提案をすぐさま受け入れ，かれを典型的な規律違反者――おそらく最初はそう考えていたのであろうが――として排除しないで，いわばドリオの逆をつくことによって，一見，それほど過酷とはおもわれない仲裁をおこなっていたかもしれないのである[219]。

5月19日，『ユマニテ』紙は，「コミンテルンは決定を下した」と題して，モスクワの評決を発表した。コミンテルン執行委員会は，「党のためにドリオを救い，かれが労働者大衆から孤立しないように，あらゆる手段をつくした」と明言し，「ドリオが統一戦線について話したり書いたりしたことは明白であるが，しかし，それは統一戦線を実現させるためではなくして，たんに党内の分裂をたくらむためだったのである」とつけくわえた。その結果，「ドリオにたいして，党の統一と反ファシズムの闘いの勝利を確実なものにするめに，必要と判断されるあらゆる思想的，組織的措置をとるための全権」がフランス共産党中央委員会にあたえられたのである[220]。

この「全権」にもとづいて，共産党指導部はドリオにつぎの5条件を守るよう要求した。

1）コミンテルンの文書を承認し，それに従うこと。

2）中央委員会にたいするあらゆる形態の争いを即刻やめること。

3）コミンテルン執行委員会の文書を『解放』に発表すること。

4）中央委員会にたいするいっさいの争いをやめることを承諾し，その指導のもとに，これまでかれの分裂主義的策動によって妨げられてきた統一戦線の行動のために，反ファシズムの闘いを始めることをあきらかにした声明を『解放』と『ユマニテ』に発表すること。

5）党の基本的規約に定められているように，『解放』をパリ北地域の地域委員会の統制下で

[218] J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp.162-163.

[219] J.-P. Brunet, *ibid*., pp.164-165.

[220] *L'Humanité*, 19 mai 1934.

発行するよう約束すること[221]。

これまでのドリオと党指導部とのあいだの紛争の経緯を考えるならば，これらの条件は極端に厳しいものとはおもわれない。それらはドリオからその党内地位を奪うことはなく，ただ中央委員会への服従を要求していただけであった。しかし，ドリオはその服従を全面的に拒絶した。数日後，かれは「コミンテルンへの第2の公開書簡」を発表し，そのなかで，フランス共産党が自己批判するよう要求し，コミンテルンにたいしては，必要とあれば国際的な委員会を介して，現在の党の状態の公平な調査を実施するよう提案した[222]。しかし，このような要求をつづけるかぎり，その結末は「除名」以外にはありえなかったであろう。

『ユマニテ』紙は頻繁に「ドリオ同志の分裂主義的策動」に言及し，事実を完全に歪曲することも辞さなかった。たとえば，5月30日，サン・ドニでおこなわれた反ファシズム・デモのときのことである。この日の夜，2つの極右同盟，愛国青年同盟とフランス連帯団が，慈善バザーの会場で集会を組織しようとして，多数の貸切りバスがパリから共鳴者たちをサン・ドニまで運ぼうとしていた。これに対抗して，反ファシズム監視委員会のアピールに答えて，サン・ドニの労働者たち，『解放』紙と『ル・ポピュレール』紙によれば1万人の労働者たちが，街頭デモをおこなった。結局，「ファシストたち」はこなかった（おそらく会場の所有者が，激しい衝突を恐れて，土壇場になって，約束を翻したからであったろう）ので，監視委員会はただちに市立劇場で集会をおこなうよう呼びかけた。多くの演説家につづいて，ドリオはこの「ファシズムにたいするみごとな応答」を賞賛し，会場全体の熱狂のなかで，「われわれは，フランス全体に反ファシズム監視委員会を組織するでしょう。それは，労働者による政権奪取というスローガンのもとに，共通のたたかいのためのすべての組織を正々堂々とひとつにまとめた，“労働のフランス”の広大な基礎を準備するためです」と語った。これにたいして，共産党指導部は，このときのドリオを「ファシズムの無自覚な到来の前兆」と表現した。

共産党政治局はまた，統一労働総同盟（CGTU）金属工業連合書記のアンブロワーズ・クロワザを介して，サン・ドニの共産党幹部と党員たちをドリオから引き離すために，ひそかにかれらの意向を打診した。しかし，だれからも，よい答はえられなかった。また，ドリオが「共産主義と労働者階級の敵」との宴会に列するのが好きな，ぜいたくな食事の愛好家だという情報が口づてに流された[223]。同時に，党書記局は，パリ北地域委員会によって，サン・ドニの地区集会を6月8日に召集させた。ドリオを支持する「サン・ドニ地区多数派」の党員たち――かれらも500人の集会をおこなった――の激しい抗議にもかかわらず，ほとんどみなサン・ドニの隣接自治体からやってきた150人ばかりの党中央委員会に忠実な共産党員が出席した集会が開かれた。こうして，サン・ドニでドリオを孤立させる策謀がしだいに強化されていった。

しかしながら，これらの策略にもかかわらず，ドリオはいっそう多くの党員たちを党指導部にたいする反逆行動に引きずり込んでいった。一方，これと並行して，共産党は，1934年5月末から6月初めに，コミンテルンの指令に従って，社会党（SFIO）にたいする政策の劇的な転換――さきにみたように，5月16日のソヴィエト最高会議幹部会の決定にその発端があった――をおこなった。以後，「下部での

[221] D. Wolf, *op. cit*., pp.122-123, 平瀬・吉田訳, pp.124-125; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.164.

[222] *L'Emancipation*, 25 mai 1934; D. Wolf, *ibid*., p.123, 平瀬・吉田訳, p.125; J.-P. Brunet, *ibid*., pp.164-165.

[223] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, pièces des 1er et 4 juin 1934.

統一戦線」は語られず，社会党員の労働者たちをかれらの指導者から遠ざけることも，かれらの活動を共産主義とモスクワの方にいそいで向かわせる必要も語られなくなり，社会党（SFIO）の「家禽の羽根をむしりとる」戦術も放棄された。反対に，「トップ」すなわち社会党（SFIO）指導部にたいして――たとえば，6月1日には，ドイツの共産党幹部エルンスト・テールマンをナチスの牢獄から釈放させるべく，共同キャンペーンを始めることを目的とした会談をおこなうための――共闘の申し入れがしつこくおこなわれるようになった。

したがって，ドリオが，とりわけ『解放』紙上で，いつトレーズはまじめになったのか，1934年1月なのか6月なのか，なぜ社会党（SFIO）指導部への提案をいまごろになっておこなうのか，コミンテルンも党中央委員会も，1月には，そのような態度は社会党指導部の力を強化する結果になるだけだと主張していたのではなかったか，と問いかける執拗なキャンペーンを始めたのも，至極当然であったろう。かれは，「1月には犯罪で日和見主義であったことが，6月には必要不可欠で革命的なことになった」という事実を痛恨の想いで確認し，共産党の指導者たちに「他人より6か月早く正論を吐いてはならない」という忠告をあたえた[224]。ドイツの悲惨な事態にようやく目を開いて，「ファシズムはブルジョワ体制よりはるかに悪である」ことに気づいたスターリンの態度の豹変がなかったならば，フランス共産党の指導部はおそらくきわめて深刻な分裂状態に陥っていたことであろう。

共産党指導部は，「ドリオ事件」に終止符を打つとともに，社会党（SFIO）への歩み寄り政策をもっと強力に推進するために，モーリス・トレーズの縄張りのイヴリーで6月23－26日に全国会議を召集した。同会議の2日まえには，共産党側の不手際のために，社会党の指導者たちは統一戦線問題について始められた交渉を中断していた。ドリオには招聘状もイヴリー会議のための討議資料も届けられず，かれを支持していた党員たちは，すべての地域で，指導部によって委任される代表権限から排除された。

会議に出席した代表たちの前でトレーズは長い演説をおこない，それにつづいた討論は，主として社会党（SFIO）への歩み寄りの問題を中心に展開された。トレーズが「どんな代価を払っても，われわれは行動を望んでいます。どんな代価を払っても，われわれは統一行動を望んでいます」とのべて閉会演説を締めくくったのは，歴史――共産党の歴史だが――の皮肉であった。共産党と社会党（SFIO）とが密接な協力関係を決めた統一行動協定を結んだのは，その1か月後の7月27日であった。「ドリオ事件」はいわば付随的問題として決着をつけられ，会議は全員一致でドリオの除名を提案したトレーズに拍手喝采を送った。ドリオの除名は，6月27日，党中央委員会によって正式に宣言された。除名の主たる理由は，かれの規律違反であった[225]。ドリオが数年にわたって主張しつづけた政策が共産党によって正式に採用されたまさにそのときに，かれは除名されたのであった。また，事実とはまったく反対に，ドリオは，かれが「統一戦線」を社会党に反対するための策略と考え，「社会党と共産党との労働者たちの歩み寄りに反対しようとし」，「社会党の家禽の羽根をむしりとろう」としたとして非難されたのであった[226]。

---

[224] D. Wolf, *op. cit*., pp.124-131, 平瀬・吉田訳, pp.126-133; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.166; 山口俊章『フランス1930年代　状況と文学』日本エディタースクール出版部, 1983年, p.126.

[225] *L'Humanité*, 27 juin et 1er juillet 1934; Maurice Thorez, *Œuvres*, livre Ⅱ, t.6, Editions sociales, Paris, 1951, pp.179-180.

[226] 1934年6月末以降の『ユマニテ』紙は，この種の言葉で満たされた。D. Wolf, *op. cit*., pp.132-133, 平瀬・吉田訳, p.134; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme*

忘れてはならないのは，ドリオの共産党離脱の出発点は，まさしく，この点に，すなわち，ヨーロッパにおけるファシズムの勢力拡大にたいしてコミンテルンのとった戦術が自殺的であるというかれの確信にあったのであり，ファシズムへの偏流にあったのではなかったということである。ドリオは「資本主義――ファシズムはその最後の転身にすぎない[227]――の危機からかならず革命が起きる」という千年王国的希望にしがみつく共産党のセクト的自閉状態が，プロレタリア階級を混乱にしか導かないことをいちはやく理解していた，ヨーロッパで数少ない共産党指導者[228]のひとりであった。

除名後，最初，ドリオは逆境にあってもすこしもくじけた様子をみせなかったが，しかし，ドリオに忠実な同志や細胞を孤立させようとする共産党指導部の策謀によって，すこしずつ後退を余儀なくされ，かれが勝負に負けたことを認めねばならなかったとき，かれのなかには共産党とコミンテルンにたいして抑えがたくあらがいがたい，すさまじい憎悪が広がった。かれのその後の変化のすべての萌芽は，そこにあった。

ドリオのその後の行動――フランス敗戦後のヴィシー政権下，対独協力にいたりつく行動――については，もとより，かれを無罪放免することはできないであろう。しかし，とりわけ政治の世界における個人の行動の変遷にたいして環境がなんらかの影響を及ぼすのを認めるかぎり，1934年におけるフランス共産党の態度がその後のドリオの行動の変化に大きな役割を演じたことを認めなければならないであろう。「ドリオは，だれの目にもあきらかな真実を勝利させるために，多大の勇気をもってたたかったのであり，無能で，嘘つきの卑怯者たちがかれをののしり，中傷したのである」（アンドレ・ティリヨン[229]）。

au fascisme, op. cit., p.167.

[227] この問題については，Nikos Poulantzas, *Fascisme et dictature. La IIIe Internationale face au fascisme*, Maspero, Paris, 1970; Pierre Milza, *Les Fascismes*, Imprimerie nationale, Paris, 1985, pp.112-119.

[228] イタリア人のアンジェロ・タスカも，そのような共産党指導者のひとりである。かれは，コミンテルンやイタリア共産党執行部で，ドリオと同様に，ブルジョワ階級の反ファシズム勢力との同盟の必要を主張して，その「誤り」を捨てるよう要求され，ドリオの除名よりまえに，イタリア共産党から追放された。

[229] A. Thirion, *op. cit*., p.397.

Dérive fasciste.
Jacques Doriot et le Parti populaire français. 3

Yukiharu Takeoka

L'histoire politique de la France des années 1930 était marquée par l'opposition violente entre la gauche et la droite. Dans cette situation, il existait un certain nombre des hommes qui sont passés de la gauche à la droite et dont l'exemple le plus représentant était sans doute Jacques Doriot. Doriot, qui occupait au début des années 1930 une place importante au sein du Parti communiste, se retrouva à peine dix ans plus tard parmi les partisans les plus actifs de l'ordre nouveau hitlérien. Comment expliquer qu'il soit amené, d'une gauche extrêmement active qui était, dès 1934, un pionnier de l'antifascisme, à la collaboration avec Hitler?

Pour Zeev Sternhell, historien israélite, la révision du marxisme est l'explication clé qui pourra faire comprendre le glissement des hommes de gauche vers la fascisme. Mais cette démonstration de Sternhell ne peut s'appliquer au cas de Doriot. Dans cet article, nous nous sommes efforcés de préciser historiquement ses itinéraires du communisme au fascisme et de montrer les conditions qui susciteraient un tel passage.

Classification JEL: N44
Mots-clés: Doriot, communisme, fascisme